

「海外研修を通して考えたこと」 平岡佳子

私は平成 26 年 7 月 9 日から 7 月 21 日までの約 2 週間に亘り、アメリカアラバマ州にあるサンフォード大学で研修を行った。私は 5 年次の 2.5 カ月ずつの実務実習を終え、日本における薬剤師の業務や役割を学んだ。その実習を通して、薬剤師も患者さんの身近な存在であるべきだと考えるようになった。現在日本では薬剤師の仕事があまり一般には知られていないように思う一方、アメリカでは薬剤師の地位が高く、患者さんにとって身近な存在であるといわれている。この日本とアメリカとの薬剤師の違いについて学びたいと思い、海外研修に参加した。

今回の研修では主に講義を受け、2 ヶ所の病院やクリニックに見学に行った。講義では様々な疾患のことや治療の仕方などを学んだ。特に印象的だったのは、ワーファリンの使い方である。日本ではワーファリンを服用する場合、納豆やクロレラなどのビタミン K を多く含む食品は摂取しないように指導をするが、アメリカでは全く摂取しないという方法ではなく、摂取した上でワーファリンの量を調節するとのことだった。

今回の研修の見学先として、Jefferson County Department of Health、St. Vincent's Hospital、Christ Health Center、Princeton Hoover、Children's Hospital があり、私は Jefferson County Department of Health と Princeton Hoover の 2 施設を見学した。どちらも外来専門のクリニックであった。これらクリニックの日本と大きく異なるところは、薬剤師がそれぞれ個人の部屋を持っているということである。日本では医師が部屋を持っていることがあっても薬剤師が部屋を持っていることはほとんどないことだと思う。アメリカではこのように薬剤師が一人ひとり部屋を持ち、患者さんと 1 対 1 で話しをしていた。

Jefferson County Department of Health には Adult health clinic、Family planning、Maternity clinic、Pediatrics clinic の 4 つの科がある。Family planning では、子育ての仕方などを相談することができ、日本ではあまり見られない科だと思ったが子育てのことを相談できる場所があるというのはよいことだと思った。特に、クリニックで相談すると、子どもの様子を見ながらしてもらえるのでいいことだと思った。このクリニックでは患者が医師と話をする前に薬剤師が薬の服薬状況を確認するなど、話をしていた。医師による診察の際には薬剤師も一緒に参加し、医師と薬剤師が患者さんを診ながら薬物治療を行っていた。このように、薬剤師が直接患者さんと会話することで薬の効果を確認することができ、医師と一緒に診ることで適切な医療を提供することができると思った。また、日本ではチーム医療というと入院患者に対して行われるというイメージだが、アメリカではこのように通常の診察でもチーム医療が行われておりすべての患者さんに対して適切な医療が提供されていると感じた。この患者面談は薬剤師だけでなく、薬学生やレジデントも行っているそうである。直接その様子を見ることはできなかったが、薬学生は一人で患者面談を行うとのことであった。私が実務実習に行った際には薬剤師の先生方が見ているところで患者さんと面談をしていたため、日本での実習の仕方とは大きく異なってい

と思った。また、このクリニックでは、薬剤師が **Travel medicine** という海外に行く人のために打つべきワクチンの情報の提供をしている。また、情報提供を行うだけでなく、ワクチンの接種も行っているとのことであった。アメリカではワクチン接種を薬剤師が行えると聞いていたが、薬局でのインフルエンザのワクチン接種程度だと思っていたので、マラリアやポリオなどのワクチンも接種できることに驚いた。

Princeton Hoover も外来専門のクリニックであるが、こちらでは患者さんが薬剤師と個別に予約をとり、面談を行っていた。ここでは主に薬剤師は糖尿病患者の血糖値の管理や、**INR** 値の管理を行い、他にも吸入器具などの服薬指導、使用方法が複雑なものの指導を行っていた。また、器具の使用法だけでなく、医薬品の子どもへの影響も説明していた。また、8月からインフルエンザのワクチン接種もしている。**INR** の結果を見てワーファリンの量を決定していた。

アメリカの薬剤師と日本の薬剤師では働き方に大きな違いがある。特に感じたのは、アメリカでは直接患者さんと話す機会が多いということだ。日本では、患者さんと話すといえば服薬指導であるが、血糖値の管理や **INR** 値の管理を薬剤師がするという事はまずない。これには薬剤師にできることが大きく異なるためではあるが、日本の薬剤師はできることが少ないということ、できたとしても実践しているところが少ないように感じる。日本ももっと積極的に患者さんに接していく必要があると感じた。

日本の優れていることは、お薬手帳の存在である。アメリカではお薬手帳のようなものはなく、もし複数機関に通院している場合は患者さんから聞き出すしか方法はない。日本では、東北大震災の際にもお薬手帳のおかげでスムーズに薬の交付ができたという話を聞くが、アメリカではそうはいかないだろう。アメリカの薬剤師の方にこのことを話すととても感心していた。お薬手帳が広まってきたのは近年であり、持っていても有効に活用できていない人も多いと思うが、これは日本の良い点であるため、もっと活用していくべきだと思った。

今回の研修を通して、日本の薬剤師とアメリカの薬剤師の相違やそれぞれの良さを実感することができた。「アメリカの医療は進んでいる」との考えが強く、アメリカの薬剤師を目指すあまり日本の良さを消してしまうことのないように、もっと日本の良さを知り、日本でしかできないことももっと考え、そのうえでアメリカの良さを取り入れていければと思う。今後の日本での薬剤師の地位が少しでも向上するように積極的に医療に参加していきたい。